

ふちゅうこくさいこうりゅう 府中国際交流サロンは、府中に住む  
にほんじん がいこくじん なかよ たす あ  
日本人と外国人が、仲良く助け合っ  
たの せいかつ ねが かつどう  
楽しく生活していくことを願って、活動を  
つづ 続けています。

# くろすろ〜ど

2015/2月号

会報誌

★★★★★crossroad★★★★★

★★★★★crossroad★★★★★



## 〜サロン月間カレンダー2月〜

### ■ サロンでお茶会

2月 6日(金) 午前10時～午後1時30分  
「料理教室」(中央文化センター)  
広島お好み焼き (参加費400円)

2月 13日(金) 午前10時30分～12時  
「絵手紙教室」(参加費100円～200円)

2月 20日(金) 午前10時30分～12時  
「生け花教室」(花代500円) 要予約

2月 27日(金) 午前10時30分～12時  
「ダンス」(桜祭りの練習)

★対象はサロン学習者またはボランティアの方。

★申込みはサロン事務局まで。

### ■ ボランティア勉強会

2月 17日(火) 午前10時～12時

\*場所: 4F会議室

テーマ: 「うまく電車に乗れるかなあ・・・」

一駅での場面会話

グループワークを通してみんなで考えます。

### ■ 井戸端会議 (おしゃべり会)

2月 26日(木) 午後2時～4時

## 「日本語学習発表会のお知らせ」

今年も、東京武蔵府中ロータリークラブの協賛を  
いただき、「日本語学習発表会」を開くことになりま  
した。府中国際交流サロンで日本語を学ぶ学習者の  
皆さんの、日頃の学習成果をためすよい機会です。  
日本語の学習を始めて間もない方、初級・中級の方  
の参加も大歓迎です。原稿を読みながら発表しても  
大丈夫です。みなさんの参加をお待ちしています!

- 日時 3月14日(土) 13:00開始
- 場所 府中駅北第2庁舎3階 第2～4会議室  
(日本語学習会の会場)

- 内容 第1部: 日本語発表会  
第2部: ティー・パーティー
- 応募資格 府中国際交流サロンで日本語を学ぶ  
学習者
- 発表テーマ スピーチのテーマは自由です。
- 発表時間 4分以内
- 募集人数 15名程度

なお、詳しいことはサロン事務局に置いてある  
「日本語学習発表会のご案内」というチラシを  
ご覧ください。  
(編集部)

# 「大森貴美枝さんのご逝去を悼む」

せんばたかし きんようよる  
仙波 昂 (金曜夜)

# イベント報告

とうきょうがいこくごだいがくれんけいこうざ  
—サロン・東京外国語大学連 携講座—

## 「府中に住む外国人と 交流しませんか？」

きんようごご いしだまさこ  
金曜午後ボランティア 石田正子

サロン設立時からのメンバーで長らくサロンの副会長を務めておられたお嬢さんのお大森英理奈さんに伺った話です。大森さんは4年位前に別の病気で検査を受けた際、肺がんを指摘されたそうです。でもその後も日常生活はさして変わらず、テニスを楽しまれ、好きなお酒も最近まで嗜まれたのです。時には病院に行かれていたようですが入院されることはなかったのです。若いころから身内の方にがんを患われる方が幾人かおられて、手術後の問題や抗がん剤で苦しむのを目の当たりにして、ご自身はがんの治療を受けず自然体であったようです。最後まで緩和治療も受けなかったそうです。亡くなったのは、昨年12月31日です。ちょっと前から味が分からなくなったといってお酒はやめられたのですが、お好きなコーヒーはずっと飲んでおられました。亡くなる日の朝ご自宅で英理奈さんとコーヒーを召し上がっているとき気分が悪くなられ、その日の内に亡くなったと伺いました。

大森さんはサロン設立時からのボランティアとして2~3年前まで活動されてきました。とても活発な方そして肺がんの治療でもそうですが、自分の意見をお持ちで、しきたりや常識にも変だと思えば変えようと提案をされる頼もしい方でした。教わる事が多い方でした。サロンの初期に金曜の夜部会でのお茶の時間の段取りを提案されたのもその例です。これは今も続いています。

食べることやお酒とおしゃべりがお好きで金曜日のサロンの後、随分ご一緒しました。そういう時には、新規開店とか、特別イベントをやるお店のちらしやクーポンなど特典を見付けるのが得意の方でした。

享年65歳です。如何にも若すぎます。大森さんとはまた飲みかつ話したかったのに残念でなりません。人の命のはかなさを思わないではられません。大森さん安らかに御眠りください。合掌

2015年1月16日、サロン教室において「防災」をテーマに交流会が開かれました。2014年10月から外大生、先生、サロンボランティアとで打ち合わせを重ねてきました。12月には府中の防災センターへ話を聞きに行き、勉強をして準備してきました。当日は公募市民18名、学習者15名、ボランティア9名、外大生13名、外大先生2名、市1名の58名の参加で大盛況でした。

今回は「地震」について話し合いました。挨拶、自己紹介、体験談の後、8つの班に分かれ、ハザードマップで自宅、近くの小中学校、避難場所、給水所を確認しました。『3.11』の時にいましたか？から話が始まり皆様の地震の体験はとても興味深い話が多く、どの班も盛り上がり休憩時間も休まず話していました。「困ったのはトイレ」という声はどの班からも出ました。「エレベーターのボタンは全部押す」「出かける時、水、チョコレート、飴、ライトなど持って行く」「家族、特に外国との連絡が取りにくい」「テレビの報道が不安を増す」など経験から生まれた教訓が多く参考になる話ばかりでした。最後に全員で「地震」が起きたら？

- \*まず命を守る(頭を守る)。
  - \*ゆれがおさまってから行動する。
  - \*避難するときのポイント。
  - \*各自3日間は自分で生活できるようにしておく。
- など対策、備えを確認しました。交流で得たそれぞれの思いと、ハザードマップ、クラッカーがお土産でした。

# 世界の文化

## 「日本で困ったこと—地震、原発事故」

中国 諸瑾



いま私は日本に来て4年になりました。府中市にすんでいます。今までで一番困ったことは、地震と原発の事故です。

皆さん、2011年3月11日の東日本大震災はもう一生忘れないでしょう。地震が来たとき、私はサロンで勉強していました。ゆれている時間は長く、広い地域がゆれました。生まれて初めての経験でした。教室の机と椅子がゆれて、先生と生徒たちは皆机の下に入りました。ゆれが止まってからみんなで階段を下りました。外を見るとビルの上の電線がゆれていました。建物から人が出てきて、道には沢山の人が立っていました。ケータイは使用できませんでした。電車もストップです。そのあとで、テレビで津波のニュースを見ました。環境は悲惨で、建物の全壊などが分かりました。車はみんな流されて壊れたそうです。このような状況は私には想像できないことでした。地震や津波で命を奪われた人たちの命の価値について考えさせられました。

この大地震後、原発事故がありました。放射能汚染は脅威です。それで私はひとりあえぎ帰国しました。でも、主人はホテルの仕事で日本に滞在しました。娘

がフランスパリ大学へ留学したので、私はひとり上海に住んで、寂しいので、震災と原発事故が少し落ち着くのをみて、再び府中に戻りました。

このような自然災害は人の命が簡単に奪われます。人は津波や地震が来たとき、どうして生きる権利が奪われるのでしょうか？私は被災した彼らから学ぶことが沢山あります。彼らの死を無駄にしてはいけなと思います。そして生きることの価値と彼らの死を語り継ぐことが大切だと思います。東日本大震災によって、私は自分のまだ残っている命をこれから大切に生きていきたいです。皆さんも一緒に考えていただければうれしいです。(以下略)

## 勉強会報告 第57回

勉強部会 萱生由美子

### 《どうしよう!? 動詞の心がわからない》 —ゲームで楽しむ動詞の活用—

○日時：1月21日(水)午前10:00~12:00

○出席者：23名

今回は、W氏の名キャッチコピーに惹かれて参加した方もいらっしゃるかもしれません。このタイトルのように、私達が無意識に使っている日本語の動詞が、実は、学習者にとってはとても難しいものなのです。そして、動詞の活用形を意識する事が、意外と私達にとっても難しいのだという事に気付くために、動詞の双六ゲームに挑戦しました。

まず、5グループに分かれ、各グループ毎に「ます形」で読み上げられた33の動詞の辞書形を、双六の図の中に記入します。そしてサイコロを振って、出た数に相応する動詞(辞書形)の「て形」「ない形」「グループ(I, II, IIIのいずれか)」を言います。とっさに出ない時はパスしてもよし、他のメンバーがサポートしてあげてもO.Kのルールです。各グループともワイワイ楽しみながら、時々紛らわしい動詞の出現に

間違えたり慌てたりしながら、無事終了しました。  
後半はまとめのペーパーを元に、I、II、IIIの各グループの「ます形」「て形」「ない形」「辞書形」「仮定形」の接続の形をみんなで確認しました。動詞のグループ分けの基準を「ない形」とする方法、そして一番むずかしい「て形」Iグループの9つの接続する形を、キラキラ星のメロディーに合わせて覚える方法をN氏のご指導(!?)のもと、実際に歌ってみました。

最後に皆さんから、“ゲームを楽しみながら動詞の形が整理できた”“今までわからなかった部分が理解出来た”“自動詞と他動詞の違いに気づいた”などの感想を聞くことが出来ました。準備をした私達も、とても楽しく学べた2時間でした。

## 新ボラさん こんにちは!

### 「楽しい日本語ボランティア」

月曜午前ボランティア 西山香代美

私は、2013年4月に夫の転勤で鳥取県米子市から府中市に引っ越して来ました。以前、名古屋市で日本語ボランティア講習を受けてボランティアを始めようと決めた矢先に夫が転勤になりできなかったこともあり、市の広報で日本語指導ボランティア講座があることを知り、是非参加したいと思い申し込みました。

9月からボランティアを始めましたが、日本語教師としてはまだまだ勉強不足で、先輩方の様に文法などをわかり易く説明することができていません。学習者の方々が日本語を使いこなせ、少しでも日本で楽しく暮らせるお手伝いをしたいという思いは強いのですが、もっと勉強して準備しておくべきだったと反省する日々が続いています。

学習者の方々は、とても勉強熱心で、2時間があっという間に終わります。その中でお互いの文化や風習について話をする事も多く、回を重ねる度に学習者の方とも温かい心の触れ合いを感じるこ

ができ、とても楽しくボランティアをさせて頂いています。

これも、先輩ボランティアの方々、同期ボランティアの方々、学習者の方々、サロンの方々などみなさんに支えられてのことだと感謝しています。

これからも、楽しみながらこのボランティアを続けていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

## 「ボランティアがライフサイクル」

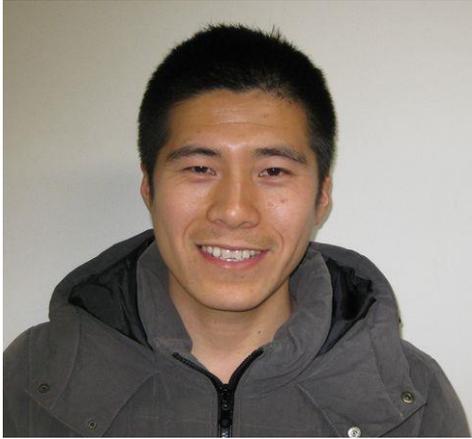
水曜ボランティア 鈴木貢治

昨年、42年の永きに亘り勤めた会社を定年退職した後、自由になる時間が出来たので、何か地域に貢献出来る事は無いかと府中市社会福祉協議会に募金を納めに行った際に、相談し紹介を受けたのが府中国際交流サロンの日本語ボランティアでした。

たまたま若い時から海外に興味があり、会社の仕事などでアジアの国々や、アメリカ カナダ メキシコ等訪問していて英語慣れは有りましたが、まさか日本語のボランティアに自分が参加させていただけるとは。今では毎週水曜日が朝に学習センターで水泳、昼食後はサロンで若い学習者の皆さんと日本語の学習、夕方より透析治療と完全にライフサイクル化され、元気の源になって来ました。

私は30代の頃にアメリカのジョージア州アトランタ市で5年程駐在生活の経験があります。渡米当初全く英語での会話が出来ず困っていましたが、良い個人教授の先生とめぐり合う事が出来て、自分なりの表現方法に自信が持てるようになってから、誰とでも積極的に話せる様に成りました。この経験を生かして現在水曜日午後に一緒に勉強をしている、若い学習者さんにも日本語表現の美しさや面白さまで伝えられ、それが理解される様微力ながら日々楽しく学習を進めてみたいと思っております。皆さんどうかよろしくお願ひいたします

ちょう ほうぐん ちゅうごく  
張 鳳軍 (中国)



「目標がたてられたら、もう半分達成したようなものですよ」

3種類の人がいると思います。運がいい人と悪い人、それに、どちらともいえない人です。私は3番目のタイプ。それだけに頑張らなければと思っています。中国は内モンゴルの出身。先に日本で働いていた実兄を頼って、2005年8月に来日しました。いま府中の中華料理店で働いています。おととしの10月に結婚(奥様は江蘇省出身)、来月には父親になる予定です。

夢は日本で自分の店を持つこと。売上とか利益より、おいしさとか栄養を一番に考えたお店にしたいです。趣味は、頑健な方ではありませんから、体をよく動かすことを心がけています。週に4、5日は10キロのジョギングと毎日80回の腕立てふせ、ときどきフルマラソンにも参加します。ベストタイムは3時間18分。3時間以内が目標です。

何をするにも気持ちが一番だと思っています。体も年齢も関係ありません。やる気になればできるものです。日本語の勉強だって同じではないですか。目標を立てたら、半分達成したようなものと語る、明るく前向きな張さんでした。(坂倉)

りくぜんたかたさいほうき さいしゅうかい  
「陸前高田再訪記」その3 (最終回)

きんやよる わだやすひろ  
金曜夜ボランティア 和田泰弘

「高田、町なくなったぞ！」  
阿部さんは、駅前地区の消防団長からそう聞いた。「それがまた、なんだかわかんねんだ。しっかり見てね一からね。高田、町なくなったぞ一って、それは聞いたんだけども、まだはつきりわかんない…」— 阿部さんには陸前高田の町がまるごと津波に呑みこまれてしまったことがまだ信じられなかった。自分の店の裏に一人で住むお婆さんを公民館に避難させたあと、阿部さんは、娘と孫の消息を求め中学校の体育館へ向かう。駐車場で娘さんの車に似たのを見つけ、一縷の望みを持つ。体育館に入ると、すでに千人くらいの方が避難していた。舞台から眺め渡すと、背の小さい親子の歩いている姿が目に入った。と同時に、その親も阿部さんを見つけ駆け寄ってきた。娘さんとお孫さんだった。「あー生きてたのか。どうやって逃げたんだ…」と、阿部さんは安堵の胸をなでおろした。寿司屋から母親の実家がある矢作という町へ向かう前に、自分のアパートへアルバムを取りに行ったこと、そのあと父親の後を辿ったこと、それから矢作へ行こうと思ったら津波が迫ってきたこと等を娘さんは話した。気仙川を逆流し山の向こうにある矢作も津波は襲った。娘さんは、最初から矢作を目指していたら津波に飲み込まれたに違いない。アルバムが命を救ってくれたことになる。

「千人近くの方が何列かに並んで、湯飲みとカップで水を一杯ずつ貰ったのさ。夜はそれしかないわけだ…」。3月11日の夜は水だけで過ごした。翌朝、おにぎり一人一個ずつ配られた。二日目のことを阿部さんはこう語る。

「その日からは、みんな家族を探して歩いているんだよね。探し歩いてもなかなか見つかんねえ。知り合い同士で会えば抱き合っ泣いている。自分の家族がい

ないって、もう泣き泣き探してる。もう、凄<sup>すご</sup>い状態<sup>じょうたい</sup>だった、その時<sup>とき</sup>は…」

三日<sup>みっかめ</sup>目<sup>め</sup>から阿部<sup>あべ</sup>さんは、食<sup>た</sup>べ物<sup>もの</sup>の係<sup>かか</sup>りになる。お寿司<sup>すし</sup>屋<sup>や</sup>さんだということ<sup>こと</sup>を、みんなわかっている。「あー、プロ<sup>プロ</sup>が来た、プロ<sup>プロ</sup>が来た！」と歓迎<sup>かんげい</sup>された。だが、店<sup>みせ</sup>では20人<sup>にん</sup>、30人<sup>にん</sup>分<sup>ぶん</sup>のご飯<sup>ごはん</sup>は炊<sup>た</sup>くが、いっぺんに1,000人<sup>にん</sup>のご飯<sup>ごはん</sup>など炊<sup>た</sup>いたことなどない。はたと困<sup>こま</sup>った阿部<sup>あべ</sup>さんは協<sup>きょうり</sup>力を<sup>りく</sup>求める。すると調理<sup>ちようり</sup>師<sup>し</sup>免許<sup>めんきょ</sup>を持った人<sup>ひと</sup>が二人<sup>ふたり</sup>、名<sup>な</sup>乗り<sup>のり</sup>出<sup>で</sup>てくれた。1,000個<sup>こ</sup>のおにぎり<sup>おにぎり</sup>を作るには4升<sup>しやう</sup>釜<sup>かま</sup>が8台<sup>だい</sup>要<sup>い</sup>る。県<sup>けん</sup>から届<sup>とど</sup>けられた釜<sup>かま</sup>は中古<sup>ちゆうこ</sup>で、炊飯<sup>すいはん</sup>の途<sup>とちゆう</sup>中<sup>ちゆう</sup>でスイッチ<sup>スイッチ</sup>が上<sup>あ</sup>がってしまったり、炊<sup>あ</sup>き上<sup>あ</sup>がってもスイッチ<sup>スイッチ</sup>が切<sup>き</sup>れず黒焦<sup>くろくろ</sup>げになったり、散<sup>さん</sup>々な<sup>ざん</sup>こと<sup>こと</sup>が続<sup>つづ</sup>いた。

自分<sup>じぶん</sup>たちでおにぎり<sup>おにぎり</sup>を賄<sup>まかな</sup>えるようになったあとは副<sup>ふく</sup>菜<sup>さい</sup>だ。マスコミ<sup>ほうどう</sup>の報<sup>ほう</sup>道<sup>どう</sup>により、カッパ<sup>カッパ</sup>ラーメン<sup>ラーメン</sup>やカレー<sup>カレー</sup>が續々<sup>ぞくぞく</sup>と届<sup>とど</sup>けられるようになったが、肝<sup>かん</sup>心<sup>じん</sup>の食<sup>しょく</sup>器<sup>き</sup>がたりない。「ど<sup>ど</sup>んど<sup>ど</sup>んい<sup>い</sup>ろ<sup>ろ</sup>んな物<sup>もの</sup>が来<sup>く</sup>る<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>だ<sup>だ</sup>け<sup>け</sup>ども、井<sup>い</sup>も血<sup>ち</sup>もねーんだ。箸<sup>はし</sup>も<sup>も</sup>ない。食<sup>た</sup>べ物<sup>もの</sup>だけ<sup>だけ</sup>は来<sup>く</sup>る<sup>く</sup>の<sup>の</sup>さ」と、頭<sup>あたま</sup>を悩<sup>なや</sup>ました阿部<sup>あべ</sup>さんはこう考<sup>かんが</sup>えた。まず、昼<sup>ひる</sup>はみんなにカッパ<sup>カッパ</sup>ラーメン<sup>ラーメン</sup>を食<sup>た</sup>べてもら<sup>もら</sup>う。夜<sup>よる</sup>は、空<sup>あ</sup>いた容<sup>よう</sup>器<sup>き</sup>をカレ<sup>カレ</sup>ーライ<sup>ライ</sup>スの器<sup>き</sup>に使<sup>つか</sup>う。しかし、それ<sup>それ</sup>も何<sup>なん</sup>度<sup>ど</sup>か使<sup>つか</sup>うと色<sup>いろ</sup>が<sup>よご</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>き<sup>き</sup>て、また器<sup>うつわ</sup>が<sup>な</sup>く<sup>く</sup>なる。「そーす<sup>そーす</sup>と、またおにぎり<sup>おにぎり</sup>になる<sup>なる</sup>んだ。そこ<sup>そこ</sup>に居<sup>い</sup>た人<sup>ひと</sup>たち<sup>たち</sup>はね、一<sup>いっ</sup>生<sup>しょう</sup>分<sup>ぶん</sup>のおにぎり<sup>おにぎり</sup>をもう握<sup>にぎ</sup>ったぞ<sup>ぞ</sup>ってぐ<sup>ぐ</sup>ら<sup>ら</sup>い…もう飽<sup>あ</sup>きた<sup>た</sup>って。寿司<sup>すし</sup>を握<sup>にぎ</sup>ったらシヤリ<sup>さんかく</sup>も三角<sup>さんかく</sup>になる<sup>なる</sup>べ<sup>べ</sup>つ<sup>つ</sup>て話<sup>はな</sup>し<sup>し</sup>です<sup>す</sup>よ。」

阿部<sup>あべ</sup>さんの話<sup>はな</sup>しは<sup>はな</sup>まだ<sup>た</sup>まだ<sup>た</sup>尽<sup>つ</sup>き<sup>き</sup>な<sup>な</sup>か<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>た。震<sup>しん</sup>災<sup>さい</sup>当<sup>とう</sup>日<sup>じつ</sup>からこれ<sup>これ</sup>ま<sup>ま</sup>での間<sup>あいだ</sup>のほん<sup>ほん</sup>の<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>ではある<sup>ある</sup>が、お聞<sup>き</sup>きした体<sup>たい</sup>験<sup>けん</sup>談<sup>だん</sup>は貴<sup>き</sup>重<sup>じゆう</sup>な記<sup>き</sup>録<sup>ろく</sup>として語<sup>かた</sup>り<sup>つ</sup>継<sup>つ</sup>いで<sup>いで</sup>いくこと<sup>こと</sup>が大切<sup>たいせつ</sup>と思<sup>おも</sup>い、ご本<sup>ほん</sup>人<sup>にん</sup>の了<sup>りよう</sup>解<sup>かい</sup>も頂<sup>いた</sup>き<sup>き</sup>この欄<sup>らん</sup>で3回<sup>かい</sup>に<sup>に</sup>わ<sup>わ</sup>たり紹<sup>しょう</sup>介<sup>かい</sup>した。

別<sup>わか</sup>れ際<sup>ぎわ</sup>に阿部<sup>あべ</sup>さんは、「『頑<sup>がん</sup>張<sup>ばう</sup>って<sup>て</sup>く<sup>く</sup>だ<sup>だ</sup>さい<sup>さい</sup>ね!』』頑<sup>がん</sup>張<sup>ばう</sup>って<sup>て</sup>ね!』と<sup>と</sup>す<sup>す</sup>ご<sup>ご</sup>く<sup>く</sup>激<sup>げき</sup>励<sup>れい</sup>され<sup>れ</sup>ま<sup>ま</sup>す。い<sup>い</sup>い<sup>い</sup>言<sup>こと</sup>言<sup>ば</sup>え<sup>え</sup>な<sup>な</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>で</sup>す<sup>す</sup>け<sup>け</sup>ど、NY<sup>NY</sup>タ<sup>タ</sup>イ<sup>イ</sup>ム<sup>ム</sup>ス<sup>ス</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>客<sup>きやく</sup>さん<sup>さん</sup>が<sup>が</sup>見<sup>み</sup>え<sup>え</sup>、『大<sup>たい</sup>将<sup>しょう</sup>、頑<sup>がん</sup>張<sup>ばう</sup>って<sup>て</sup>る<sup>る</sup>ねー!』』<sup>』</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>言<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>た<sup>た</sup>時<sup>とき</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>癒<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>れた<sup>た</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>な<sup>な</sup>気<sup>き</sup>持<sup>もち</sup>ち<sup>ち</sup>に<sup>に</sup>な<sup>な</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>した。そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>辺<sup>へん</sup>で<sup>で</sup>誰<sup>た</sup>か<sup>か</sup>高<sup>たか</sup>田<sup>た</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>に<sup>に</sup>会<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>たら、『頑<sup>がん</sup>張<sup>ばう</sup>って<sup>て</sup>ね!』』も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>ど、『頑<sup>がん</sup>張<sup>ばう</sup>って<sup>て</sup>る<sup>る</sup>ねー!』』<sup>』</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>言<sup>い</sup>う<sup>う</sup>と、喜<sup>よろこ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>か<sup>か</sup>も<sup>も</sup>し<sup>し</sup>れ<sup>れ</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>よ。」と<sup>と</sup>笑<sup>えが</sup>顔<sup>かた</sup>で<sup>で</sup>語<sup>かた</sup>つ<sup>つ</sup>た。  
(おわり)



絵手紙 永田光子

## 京都だより

～99～

かこみらい  
「過去と未来」

すのうとお  
数納基雄

東京<sup>とうきやう</sup>は<sup>は</sup>つ<sup>つ</sup>ね<sup>ね</sup>に<sup>に</sup>未<sup>み</sup>来<sup>らい</sup>を<sup>を</sup>追<sup>お</sup>っ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>都<sup>と</sup>市<sup>し</sup>です<sup>す</sup>。新<sup>あたら</sup>しい<sup>い</sup>地<sup>ち</sup>下<sup>か</sup>鉄<sup>てつ</sup>を<sup>を</sup>引<sup>ひ</sup>こ<sup>こ</sup>う。道<sup>どう</sup>路<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>造<sup>つく</sup>ろ<sup>う</sup>う。ス<sup>ス</sup>カ<sup>カ</sup>イツ<sup>ツ</sup>リ<sup>リ</sup>ー<sup>ー</sup>を<sup>を</sup>建<sup>た</sup>て<sup>て</sup>よう<sup>う</sup>。日<sup>に</sup>本<sup>ほん</sup>橋<sup>はし</sup>の<sup>の</sup>再<sup>さい</sup>開<sup>かい</sup>発<sup>はつ</sup>だ。オ<sup>オ</sup>リ<sup>リ</sup>ン<sup>ン</sup>ピ<sup>ピ</sup>ック<sup>ック</sup>招<sup>しょう</sup>致<sup>ち</sup>だ。国<sup>こく</sup>立<sup>りつ</sup>競<sup>きやう</sup>技<sup>ぎ</sup>場<sup>じやう</sup>を<sup>を</sup>建<sup>た</sup>て<sup>て</sup>替<sup>か</sup>え<sup>え</sup>な<sup>な</sup>く<sup>く</sup>ち<sup>ち</sup>や。個<sup>こ</sup>人<sup>じん</sup>も<sup>も</sup>忙<sup>いそ</sup>が<sup>が</sup>しい。評<sup>ひやう</sup>判<sup>ばん</sup>の<sup>の</sup>レ<sup>レ</sup>ス<sup>ス</sup>ト<sup>ト</sup>ラ<sup>ラ</sup>ン<sup>ン</sup>に<sup>に</sup>行<sup>い</sup>か<sup>か</sup>な<sup>な</sup>く<sup>く</sup>ち<sup>ち</sup>や。人<sup>にん</sup>気<sup>き</sup>ス<sup>ス</sup>イ<sup>イ</sup>ー<sup>ー</sup>ツ<sup>ツ</sup>も<sup>も</sup>食<sup>た</sup>べ<sup>べ</sup>て<sup>て</sup>み<sup>み</sup>たい。新<sup>しん</sup>型<sup>がた</sup>ス<sup>ス</sup>マ<sup>マ</sup>ホ<sup>ホ</sup>も<sup>も</sup>欲<sup>ほ</sup>しい。て<sup>て</sup>な<sup>な</sup>わ<sup>わ</sup>け<sup>け</sup>で、古<sup>ふる</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>は<sup>は</sup>眼<sup>がん</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>ない。東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>も<sup>も</sup>自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>も<sup>も</sup>ず<sup>ず</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>若<sup>わか</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>も<sup>も</sup>り<sup>り</sup>で<sup>で</sup>い<sup>い</sup>る。わ<sup>わ</sup>た<sup>た</sup>し<sup>し</sup>も<sup>も</sup>東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>時<sup>じ</sup>代<sup>だい</sup>は<sup>は</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>だ<sup>だ</sup>つ<sup>つ</sup>た。京<sup>きやう</sup>都<sup>と</sup>に<sup>に</sup>来<sup>き</sup>た<sup>た</sup>当<sup>たう</sup>座<sup>ざ</sup>、空<sup>あき</sup>地<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>見<sup>み</sup>ると「も<sup>も</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>い<sup>い</sup>ない、ビ<sup>ビ</sup>ル<sup>ル</sup>が<sup>が</sup>建<sup>た</sup>つ<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>に」と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>い、「い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>ん! 東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>に<sup>に</sup>毒<sup>どく</sup>さ<sup>さ</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>る」と<sup>と</sup>反<sup>はん</sup>省<sup>せい</sup>し<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>した。京<sup>きやう</sup>都<sup>と</sup>は<sup>は</sup>過<sup>か</sup>去<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>現<sup>げん</sup>在<sup>ざい</sup>が<sup>が</sup>近<sup>ちか</sup>い。こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>世<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>世<sup>よ</sup>も<sup>も</sup>近<sup>ちか</sup>い。そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>が<sup>が</sup>京<sup>きやう</sup>都<sup>と</sup>を<sup>を</sup>流<sup>なが</sup>る<sup>る</sup>時<sup>じ</sup>間<sup>かん</sup>です。京<sup>きやう</sup>都<sup>と</sup>の<sup>の</sup>神<sup>じん</sup>社<sup>じや</sup>仏<sup>ぶつ</sup>閣<sup>かく</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>か<sup>か</sup>千<sup>せん</sup>年<sup>ねん</sup>も<sup>も</sup>昔<sup>むかし</sup>の<sup>の</sup>物<sup>もの</sup>です。で<sup>で</sup>も<sup>も</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>多<sup>おほ</sup>く<sup>く</sup>が<sup>が</sup>日<sup>にち</sup>常<sup>じやう</sup>に<sup>に</sup>生<sup>い</sup>き<sup>き</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>です。

# 私の☆つばやき

～サロン・ツイッター・コーナー～

## ★ 正しいのは、どちら？

- ① ア 上へ下への 大騒ぎ  
イ 上を下への 大騒ぎ
- ② ア 深い きずな  
イ 強い きずな
- ③ ア 笑みが こぼれる  
イ 笑顔が こぼれる
- ④ ア 恩に 着せる  
イ 恩を 着せる
- ⑤ ア 青田刈り  
イ 青田買い
- ⑥ ア 取りつく 島もない  
イ 取りつく 暇もない
- ⑦ ア 彼は 素人はだしの 腕前だ  
イ 彼は 素人ばなれした 腕前だ

<正解> ①イ ②イ ③ア ④ア ⑤イ  
⑥ア ⑦イ

(サンリオ「小学校で習った日本語」より)

「ちおいんさん」のお茶会へ行くねん。お弁当も出るし楽しみやわ。京都人は知恩院を「ちおいんさん」と呼びます。大丸デパートを「大丸さん」と言うように。心の中で「大丸さん」と「ちおいんさん」がなんの違和感もなく共存しているのです。こんど「天神さん」へ行こうよ。北野天満宮の毎月25日の縁日、盛大な露天市が立ちます。東寺の「弘法さん」とともに骨董市は京都人の大きな楽しみです。いいお天気だから高台寺の桜を見てから、茶店で桜餅でも食べようか。江戸時代の「向島の花見」となんら変わらぬ行動を、ふつうにやっています。そして8月16日、京都市民はいっせいに「大文字送り火」を仰いでゆく夏を惜しみ、ご先祖様の霊をあの世へお送りするのです。

「ちょっと増上寺さんに寄ってから銀座へ回ろうか」なんて東京人が言うでしょうか。そもそも江戸を築いた家康さんが、東京の大恩人と意識されているでしょうか。話題にのぼる江戸の名残りは、外国人の集まる雷門くらいではないか。異色なのが「おばあちゃんの原宿」です。熱烈な参詣者を集める巣鴨とげぬき地蔵の縁日です。おばあちゃん達は長寿祈願をかねて命の洗濯をするのです。ここだけ京都時間が流れています。昭和レトロたっぷりです。東京はあまりにも急激に変貌しました。古いものを壊してしまいました。わたしの大好きな江戸八百八町の時代劇は、いま京都でしか撮影できないのです。昔ながらの安らかな環境が身近に残っている京都の幸せを感じています。小春日和の一日、広々したお座敷で美しい庭の紅葉をながめながら、昼のお弁当をいただきます。



絵手紙 チャーミー(ベトナム)

## 「ことばのゆらい」馬編

水、金ボランティア 堤林 初音

私たちの住んでいる府中市には、全国区で有名な東京競馬場があります。今回は馬がゆらいのことばを集めてみました。

今ボランティアをなさっている男性の方々は退職

されるまでは、「馬車馬のごとく」働いていらしたことでしょ。馬車を曳いている馬のごとく、会社人間として脇目もふらず働くことをいいます。

そして楽しみは競馬という方が多く、初心者の方は詳しい方の「尻馬に乗る」ことからはじめ、だんだん「下馬評」を自分なりに研究するようになります。気持ちを通じる方を「馬が合う」と言い、楽しいお仲間になり、仕事も趣味も気持ちよく一緒に出来ます。

日本に馬が渡ってきたのは、弥生時代の終わりのころと言われているだけに、馬にゆらいする言葉は沢山あります。

「馬の耳に念仏」とは聞く耳を持たない人に何をいっても無理だという時に使います。ありえないことがおこる例えとして「瓢箪から駒(馬のこと)」と言い、乗りこなすのに苦労する馬を「じゃじゃ馬」と言いますが、今ではお転婆の女の子のことを言います。収穫の秋はおいしい食べ物も多く、つい食べ過ぎて肥り、「天高く馬肥ゆる秋」だからしょうがないかなーなんて弁解したりしている午年の私がいいます。

(Aunty)

## 世の中あれこれ

### 「異文化共生」

どうも最近、人間がお互いに仲良く暮らすことを忘れ始めたように感じます。相手を思いやり、相手の思いを充たすことを忘れ、自分の思いや要求を充たすことを優先して考えるように感じます。そのため、「自分は正しくて、相手は間違っている」とお互いに思っ行動しているように感じます。

その行動を、双方が色々な大義名分で正当化し、互いに相手を非難しあっているのです、なかなか解決や和解に進まず、その間にも状況が更に悪化していく。本来、人間は孤独がとても苦手なのに、その孤独に近づいています。

一度お互いが、相手の立場や状況や歴史の中に立って、なぜ相手がそのように感じ、考え、判断し、発言

し、行動するのか 思いやってみるとよい。そうすると、多くの場合は、自分自身ももしその立場にいれば、相手と同じような気持ちになり、行動するかもしれないことに気づくことが多いのに、と感じます。

(小林啓一郎)

### ～編集後記～

皆さん、1月1日付『広報ふちゅう』をご覧になりましたか。サロンの方々が数名登場していましたね。表紙にはミャンマー出身のエイマチヨウさん・ピーターさんご夫妻と愛息ブライアン君の家族写真。タブロイド判の見開きページをひらけば、高野市長との「新春対談」、フィリピン出身の浅井ローナさん、中国出身の李紅潔さん、台湾出身の蔡易達さん、韓国出身の金殷正さん、それぞれの談話と写真が載っていました。大学講師の蔡易達さんはいわずもがな、皆さん実に立派な日本語での内容ある話しぶり。サロンの仲間として誇らしい気分になるほどでした。高野市長も「とにかく楽しい時間」で「話し尽きないほど」だったというご感想。サロンにも幸先よいスタートとなりました。

(坂倉)



【編集】会報部会/ 安島、飯島、坂倉、篠塚、進藤、数納、高柳、堤林、増田、和田

【事務局】電話：042-352-4178

E-mail : salon@fuchukokusai.gr.jp

サロンのホームページ

http://www.fuchukokusai.gr.jp

